

新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」&第7番

カルロス・クライバー(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ベートーヴェン:交響曲第6番「田園」

シューベルト:交響曲第5番

カール・ベーム(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

エソテリック(株)独占販売 2018年12月10日 発売

ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」&第7番

カルロス・クライバー(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

- 品番:ESSG-90190
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222568
- レーベル:DEUTSCHE GRAMMOPHON
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:交響曲



ベートーヴェン:交響曲第6番「田園」

シューベルト:交響曲第5番

カール・ベーム(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

- 品番:ESSG-90191
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222575
- レーベル:DEUTSCHE GRAMMOPHON
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:交響曲



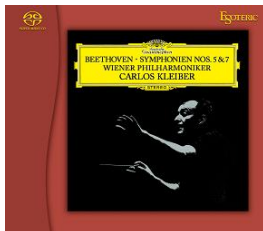
- DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2 チャンネル・ステレオ[マルチなし]
- 美麗豪華・紙製デジバック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この2作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」&第7番 カルロス・クライバー(指揮) ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

カルロスの圧倒的な凄み、ここに極まる。

■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。今回はアナログ時代全盛期にウィーン・フィルが名指揮者と録音した極め付きの名盤 2 枚を Super Audio CD ハイブリッドで発売いたします。

■残されただけでも貴重なカルロスのセッション録音

亡くなってから 15 年が経とうとする今日でも、その人気に衰えの兆しが見られない指揮者カルロス・クライバー(1930-2004)。優美で華麗な指揮姿、極端に少ない演奏会やレパートリー、キャンセルの多さ、そして何よりもオペラ・コンサートを問わず、演奏そのものの圧倒的な魅力によって、数多くの聴衆を魅了したカリスマであり、録音嫌いであることでも知られていました。クライバーのセッション録音は、1973 年の「魔弾の射手」に始まり、1982 年の「トリスタン」にいたるドイツ・グラモフォンへの録音 8 点と EMI (現ワーナー・ミュージック)録音 1 点のみ。どれもが細部まで緻密に考え抜かれたカルロスならではの解釈で、今聴いてもその極めて個性的な輝きは私たちの心をとらえてやみません。当アルバムは、1970 年代にウィーン・フィルと録音したベートーヴェンの交響曲第 5 番と第 7 番の 2 曲をカップリングしたもの。もともと単独の LP として 1975 年と 1976 年に発売されていましたが、CD 時代に入り、1995 年の「DG オリジナルス」シリーズでのリマスター発売からこのカップリングで定着した定番の最新 DSD リマスターです。

■数少ないコンサート・レパートリー

カルロスはもともとオペラ指揮者としてその指揮活動を開始したということもあって、シンフォニーやオーケストラ曲を取り上げるようになったのは比較的遅く、しかも生来自己批判が厳しいという性格もあって、生涯に指揮したシンフォニーやオーケストラ曲のレパートリーは非常に限られていました。ベートーヴェンの交響曲では第 4 番、第 5 番、第 6 番、第 7 番の 4 曲だけで、セッション録音が残されたのは当アルバムに収録された第 5 番と第 7 番のみです。

■鋼のように強靭な響きの第 5 番

1974 年 3 月から 4 月にかけて録音された交響曲第 5 番は、前年録音のウェーバー「魔弾の射手」でセンセーショナルなレコード・デビューを果たしたカルロスにとって初のシンフォニーの録音となったもので、ウィーン・フィルともこのセッションが初共演(本番を経てからセッションに持ち込むという道筋ではなく、いきなりセッションでの顔合わせ。もっとも前年 10 月にウィーン国立歌劇場で「トリスタン」新校訂上演を 5 回振っており、ウィーン・フィルの母体である国立歌劇場管とは共演済み)。ウィーン・フィル

とはこの録音の後、1974年10月(ブラティスラヴァとイェーテボリへのツアー)、そして1981年4月(メキシコ・ツアー)における演奏会でもこの交響曲を演奏しています。有望な若手指揮者とウィーン・フィルを組み合わせる有名交響曲を録音するという手法は他にも多くの例がありますが、このカルロスのベートーヴェン第5番ほど大きなセンセーションを巻き起こし、発売後40年以上経ってもいまだに名盤として聴き継がれている録音は多くはありません。全曲に漲る若武者のような圧倒的な勢いと細部への緻密な目配りとが極めて高度な次元で両立した稀有の名演といえるでしょう。第1楽章の運命動機の提示からして重厚でありかつしなやかさを兼ね備え、展開部における動機の鮮やかな捌き方も有無を言わさぬ説得力があります。フレージングに工夫が凝らされた第2楽章の美しい歌、音を割ったウィンナ・ホルンの吹奏が剛毅な味わいを出す第3楽章主部と軽快なトリオとの対比、そして遅めのテンポで堂々と進軍する第4楽章まで息もつかせぬ音楽が展開され、ウィーン・フィルもいつもの優美さよりも鋼のように強靱な響きでカルロスの棒に忠えています。

■各パートが透けて見えるようなクリアかつ軽やかなサウンドの第7番

第5番の成功を受けて1975年から76年にかけて録音された交響曲第7番も、第5番同様演奏会とは無関係のセッションで録音されたもので、ウィーン・フィルとは上述の1981年4月のメキシコ・ツアーでも演奏し、さらに1982年2月の定期演奏会(カルロスにとっては遅まきながらの定期デビュー)でも共演しています。この交響曲は、1983年10月のコンサートへボウ管へのデビュー(ユニテルによる映像収録が実施されソフト化)、1986年5月のバイエルン国立管との日本ツアー(最終日の人見記念講堂公演をNHKが映像収録)にもプログラミングされるなど、その限られたオーケストラ・レパートリーの中でカルロスが愛奏し、その代名詞のような作品となりました。カルロスにとって生涯最後の演奏会となった1999年2月、カルガリにおけるバイエルン放送交響楽団との演奏でも取り上げられています。このウィーン・フィルとのセッション録音も、「リズムの聖化」とも称されるこの作品とのカルロスの抜群の相性の良さを示したもので、重厚な響きが一貫した第5番とは異なり、オーケストラの各パートが透けて見えるようなクリアかつ軽やかなサウンドで、モチーフやリズムが交錯し軋轢を生みながら前進していく音楽の面白さをこれ以上ないほど明解に提示しています。特にこの曲で重要な役割を担う第2ヴァイオリンを右側に配し第1ヴァイオリンと対抗にすることで、2つのパートが拮抗する効果を鮮明にしている(特に第4楽章のコーダ直前)のはこの時代の演奏としては珍しい措置といえるでしょう。もう一つ珍しい点と言えば第2楽章を結ぶ弦のパートのアルコをピツィカートに変えていることでしょう。これはクレンペラーなど一部の指揮者が採用している修正ですが、カルロスの父エーリヒも同様の修正を取り入れており、カルロスが父エーリヒから受け継いだ音楽的遺産の大きさを示す一例といえましょう。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音はミュージックフェラインザールで行われていますが、プロデューサーはヴェルナー・マイヤー(第5番)、ハンス・ウェーバー(第7番)、エンジニアはハンス=ペーター・シュヴァイクマン(第5番)、ヨープスト・エーデルハルト/ユルゲン・ブルグリン(第7番)と異なっており、そのことも重厚でマスの響きで聴かせる第5番、大き目の明解な音像で細部のクリアネスが耳に入る第7番という、収録サウンドのイメージの差異につながっているのかもしれませんが。定評ある名盤だけにCD時代初期にCD化されて以来、何度も再発売が繰り返され、1995年にはOriginal Image Bit Processing (OIBP)方式による24ビット・リマスター、2003年にはSuper Audio CDハイブリッド、そして2018年には「ハイレゾCD」でも発売されています。今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。



■「フルトヴェングラーとトスカニーニの両極がここで結びついてしまったよう」

◎交響曲第5番

「一度は聴く価値のある強い演奏である。クライバーの指揮は、既成のさまざまな再現の仕方を切り抜けて自己主張をしてみたいという意欲よりも何よりも、どうしてもこうしかゆきようがないという、きわめて切実なものに貫かれている。周囲を顧みるより、自我にひたむきな、切羽詰まったものがある。」

(『レコード芸術』1975年8月号、推薦盤)

「肉体を熱くする音楽があるとするなら、それはまさしくカルロス・クライバーの指揮棒が導き出したものといえよう。音楽以外の何の力も借りることなく、音楽そのものを完全燃焼させるようなすごさが、ここにはある。」 (レコード芸術・別冊『クラシック・レコード・コレクション不朽の名盤 1000』、1984年)

「おびたしいこの曲の録音の中でも屈指の秀演である。速めのテンポによる第1楽章から凄いいほどの緊張感が漲っており、オーケストラの響きも堅く引き締められている。そこには聴き手を高揚させずにはおかない情熱の高まりと意志的な力があり、全曲を通じて正統的な造形と豊かな歌が聴き手を納得させずにはおかない。」 (『レコード芸術・別冊 Classic CD Catalogue '89』、1989年)

「カルロス・クライバーという指揮者はきわめて先鋭な現代感覚と父親ゆずりの多少古めかしい演奏様式を無理なく同居させている。第1楽章では早めのテンポをとり、贅肉をそぎ落としたような弦の響きと共に、内面的な情熱の強さを印象付けるのがユニークである。伝統的な安定感の中に鮮烈な個性を示した快演というべきであろう。」

(レコード芸術・別冊『クラシック・レコード・ブック VOL.1 交響曲編』、1985年)

「この曲の演奏の、20世紀の型を作り上げたともいべきフルトヴェングラーとトスカニーニの両極がここで結びついてしまったよう。よく聴けば、テンポを大きく動かしたり、効果を高める工夫をしたりする恣意的なところはとても少ないのだが、それでいて人間の肉体的感覚を離れた、機能としての音楽からはかけ離れている。主題の提示からしてこの演奏は劇的なのだ。」

(レコード芸術選定『クラシック不滅の名盤 800』、1997年)

「『寄らば斬るゾ』といわれているのに、それでもなお、ノコノコと近づいてしまいたくなる演奏。ここには異様なほどの鋭利さ、緊迫感、推進力のようなものが満ちており、つい直接触れてみたくなってしまうような魅力を持っている。こうしたスリリングな要素は、Cクライバーの独壇場だ。」

(ONTOMO MOOK『クラシック名曲大全 交響曲編』、1998年)

◎交響曲第7番

「音楽は前へ前へと推進力を失わず、聴き手にホットな興奮を掻き立てる。テンポは一貫して快速そのもので、そのエキサイティングなことでは、ほとんどワン・アンド・オンリーといってよいだろう。ウィーン・フィルもクライバーの要求にしなやかに反応して、熱演ではあるが決して騒々しくならないのはさすが。この曲の演奏史上に大きなマイルストーンを打ち立てた超名演だと思う。」

(レコード芸術・別冊『クラシック・レコード・ブック VOL.1 交響曲編』、1985年)

「恐るべき劇的感覚によって支配されていながら、その劇的感覚が曲そのものからくる素直な表現でもある。第1楽章が踊り出すときのめくるめく思いや、まるで一切の感傷を許さないとばかりに疾走するアレグレットの息をのむ感覚も特別だけれど、やっぱり終楽章が誘う錯乱は21世紀にも死なないだろう。」

レコード芸術選定『クラシック不滅の名盤 800』、1997年)

「作品全体の基礎になっているさまざまなリズムの性格を、これほどはっきり描き分け、生命を与えた演奏はない。ここでは強靭さとしなやかさが結びついている。リズムもメロディも常に彼の精神や感情の動きと密接に結びついて、強い説得力をもたらす。テンポを細かく動かしても、そのために演奏の自然な流れが損なわれることはない。」 (ONTOMO MOOK『クラシック名曲大全 交響曲編』、1998年)

「あらゆるこの曲の録音の中でも最高位におかれてより稀代の名演である。全4楽章を一分の隙もな

い造形でまとめ、作品の古典的な美を満足させているが、クライバーはそこに力強い情熱を注入して、激しい共感をもってリズムを生き生きと躍動させている。以下も全曲のクライマックスを終楽章に設定し、一貫してコーダまで高揚を続ける凄絶な演奏である。」

(『レコード芸術・別冊 Classic CD Catalogue '89』、1989年)

[収録曲]

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

交響曲 第5番 ハ短調 作品67《運命》

[1] 第1楽章:アレグロ・コン・プリオ

[2] 第2楽章:アンダンテ・コン・モート

[3] 第3楽章:アレグロ

[4] 第4楽章:アレグロ

交響曲 第7番 イ長調 作品92

[5] 第1楽章:ポコ・ソステヌート〜ヴィヴァーチェ

[6] 第2楽章:アレグレット

[7] 第3楽章:プレスト〜アッサイ・メノ・プレスト

[8] 第4楽章:アレグロ・コン・プリオ

[録音]1974年3月29日、30日&4月4日(交響曲第5番)、1975年11月26日〜29日、1976年1月16日(第7番)、ウィーン、ムジークフェライン大ホール(*赤字はカルロス・クライバーのオンライン・ディスコグラフィによっています。ジャケット表記は月だけです。)

[初出]交響曲第5番 2530 516 (1975年)、交響曲第7番 2530 706 (1976年))

[日本盤初出] 交響曲第5番 MG2490 (1975年7月1日)、交響曲第7番 MG1030 (1976年12月1日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー] ヴェルナー・マイヤー(第5番)

[エグゼクティブ・プロデューサー]ハンス・ヒルシュ博士(第7番)

[レコーディング・プロデューサー]ハンス・ウエーバー

[バランス・エンジニア]ハンス=ペーター・シュヴァイクマン(第5番)、クラウス・シャイベ(第7番)

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生 平野昭

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



ベートーヴェン:交響曲第6番「田園」

シューベルト:交響曲第5番

カール・ベーム(指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

このウィーン・フィルの響きは、ベーム晩年の完熟の輝きそのもの。

■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。今回はアナログ時代全盛期にウィーン・フィルが名指揮者と録音した極め付きの名盤 2 枚を Super Audio CD ハイブリッドで発売いたします。

■ドイツ・オーストリア音楽の本質を真っ正直に伝えるベーム

生前はウィーン・フィルやベルリン・フィルから神のように崇められ、カラヤンと人気を二分したオーストリアの名指揮者カール・ベーム(1894-1981)。音楽を流麗に磨き上げるカラヤンの派手な音楽作りと比べて、素朴で質実剛健・愚直なまでに音楽に忠実なベームの音楽は、ドイツ・オーストリアのクラシック演奏の本質を伝えるものとして高く評価されていました。1970 年代以降、つまりベーム 70 代後半から 80 代にかけての晩年の 10 年間は、クラシック音楽の伝統の守護神としての存在感を増し、特に日本においては 3 度の来日公演の絶賛とも相まって、急激にその評価と人気を高めていった時期でもありました。そのベーム生涯最後の 10 年間の冒頭と最後期に録音された 2 曲をカップリングしたのが当アルバムです。

■1970 年代、ベーム晩年の輝きを刻印した名演

1970 年代のベームは録音面でも充実の極みにありました。1930 年代の SP 時代以来長い盤歴を誇るベームでしたが、意外なギャップも多く、70 年代はそれらのギャップを埋めていく時代でもありました。オーケストラも 60 年代に数多く録音したベルリン・フィルに代わってウィーン・フィルが起用されるようになり、ブルックナーの交響曲第 3 番・第 4 番・第 7 番・第 8 番、ブラームスの交響曲全集、ドヴォルザーク:新世界、R.シュトラウス「英雄の生涯」、J.シュトラウス:ワルツ集、ワーグナー:管弦楽曲集、モーツァルト「レクイエム」とベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」のステレオ再録音などはその一例ですが、この充実の 10 年間の劈頭を飾ったのが 1970 年～72 年にかけて録音されたウィーン・フィルとの「ベートーヴェン:交響曲全集」でした。ベートーヴェン生誕 200 年の 1970 年に録音された第 5 番と第 9 番で開始され、翌 71 年の第 6 番「田園」、そして 72 年 9 月に残りの 6 曲が一挙に収録されて完結したこの全集は、1973 年のドイツ・グラモフォン創立 75 周年を記念するアニヴァーサリー・エディションとしてハイドンからシベリウスにいたる 10 人の作曲家の交響曲全集(または選集)の一環として同社入魂の企画でもありました。またこのベームのベートーヴェン全集は、(わずかの例外を除き)60 年代を通じて強力な専属契約に縛られていたデッカ・レーベルのみに録音を行っていたウィーン・フィルが、初めてドイツ・グラモフォンに録音するプロジェクトでもあり、その意味でも歴史的な意味合いを持つ録音となったのでした。

■ベーム唯一の録音となった「田園」

1971 年 5 月録音の第 6 番「田園」は、この全集の 9 曲中最も高く評価されてきた演奏です。不思議なことにベームにとってはこの曲生涯唯一のセッション録音となったものですが、スケール雄大な構想の中で、過度な表情付けを排しむしろ淡々と歩みを進めることでかえってウィーン・フィルの持つ圧倒的な美感を引き出し、ひいてはそれが作品の本質を突くという高度な次元での名演が実現したのでした。デッカ時代のゾフィエンザールで収録された明晰・明解な、しかし雰囲気欠けるオンマイクの音作り

に比して、録音場所をミュージックフェラインザールに移し、その美しい残響を採り入れることで光輝を増した、魅力あふれるウィーン・フィルのサウンドが、質実剛健を貫くベームの解釈に微笑みを加えているかのようです。

■ノスタルジックなシューベルトの第5番

一方1979年暮れに録音されたシューベルトの交響曲第5番は、ベーム晩年の10年間の最後の時期の記録で、初出は凄絶な演奏であるがゆえにベームの隠れた名盤として知られる1978年録音のシューマンの交響曲第4番でした。ベームがこのシューベルト若書きの佳品を初めてウィーン・フィルで演奏したのは第2次大戦中の1943年のことで、その後44年、53年、65年、67年、78年と取り上げ、55年にはデッカにモノラル録音も残しています。71年のベートーヴェン「田園」と比べると、よりゆっくりとした歩みの中で老巨匠がまるで過去を振り返るようなノスタルジックな趣さえたたえ、「田園」の時よりもより近接したサウンド・イメージで捉えられた、ウィーン・フィルの艶のある弦楽パート、チャーミングな木管が花を添えます。ブルーノ・ワルター指揮コロンビア交響楽団のステレオ録音と双璧を成す懐古主義的な名演ともいえましょう。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音を担ったのはドイツ・グラモフォンのベテラン、ギュンター・ヘルマンズ。客席が空だと残響が多く、セッション録音は必ずしも容易ではないミュージックフェラインザールの響きの本質をとらえる手腕はさすがといえましょう。「田園」の時はオーケストラ全体の響きをやや遠めの距離感で見通せるような音作りをしたかと思いきや、シューベルトの第5番ではより近めの響きを取り入れることで作品の持つ親密さを自然に醸し出すなど、ベテランならではの仕事ぶりが刻まれています。2曲のうち特に「田園」は、定評ある名盤だけにCD時代初期にCD化されて以来、カタログから消えたことがなく、1995年にはOriginal Image Bit Processing (OIBP)方式でリマスターされたDGオリジナルスにも組み込まれていました。シューベルトの第5番はその95年のオリジナルス発売時にカップリングされたことがあり、それ以来このカップリングで再発売されていますが、DSDリマスタリングによるSuper Audio CD化は初めてです。今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■「第2楽章の比類ない美しさ —— これを凌駕する演奏など皆無」

「ゆっくりとしたテンポで、どこにも競ったり意気込んだところがなく、悠々自適、作品をじっと見つめてその仕上げを楽しんでいるような演奏ぶりである。いかも全ての構成がすっきりしているのはベーム解釈が主観に走らず、常に作品自体を見抜いて客観的な基準に立って行われているからである。」

(『レコード芸術』1976年4月号、推薦盤[交響曲全集として])

「ベームとウィーン・フィルによるベートーヴェンの交響曲全集で、これが一番成功している。第1楽章はやや無造作なくらいのテンポで進むが木管が絶妙に絡み、スケルツォ～フィナーレではベームの録音には珍しくユーモアや指揮者の微笑みさえ感じさせる。特にフィナーレは、テーマの繰り返しのたびに表情が変化し、ヴァイオリンが輝きながら田園賛歌を高らかに歌い上げている。」

(『クラシック・レコード・ブック VOL.1 交響曲編』、1985年)

「『田園』は実に素晴らしい。なんのケレン味もなく、そのまま曲と共に遊べる楽しいベートーヴェンだ。特に弦のソフトな響きがいかにウィーンを感じさせる第2楽章(管の響きも全く素晴らしい)、力を抜かずに十分の感謝を歌って大きく進む終楽章は実に楽しい。」

(『レコード芸術・別冊 Classic CD Catalogue '89』、1989年)

「ベームとウィーン・フィルが絶頂期を迎えていたころの録音である。飾り気のない実直な演奏で、楷書体的ともいえる全体の曲運びはベートーヴェンの音楽構造を偏りなく明らかにしている。ベームのつくる音楽的骨組みにウィーン・フィルの弦や管の音色やハーモニーの美しさが血と肉を与えていると言っていいかもかもしれない。テンポは全体として遅いが、リズムとアーティキュレーションが明確なベーム

の棒は曲自体を弛緩させることが全くない。」

(レコード芸術選定『クラシック不滅の名盤 1000』、2007 年[交響曲全集について])

「《田園》という曲がベームの資質に見事なまでに相応していたことはいうまでもない。オーケストラがウィーン・フィルであったこともその融合性を高める結果となっており、望みうる最良にして最適の演奏であったことは疑いない。ベームのアプローチはあくまで音楽の構造や構成をしっかりと整え、バランス感のある安定したドライビングがベースにある。第 2 楽章の比類ない美しさなど、これを凌駕する演奏など皆無のように思えてくる。」 (ONTOMO MOOK『クラシック名盤大全 交響曲編』、1998 年)

[収録曲]

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

交響曲 第 6 番 ヘ長調 作品 68 《田園》

[1] 第 1 楽章: 田舎に到着したときの朗らかな感情のめざめ(アレグロ・マ・ノン・トロppo)

[2] 第 2 楽章: 小川のほとりの情景(アンダンテ・モルト・モツ)

[3] 第 3 楽章: 農民の楽しい集い(アレグロ)

[4] 第 4 楽章: 雷雨、嵐(アレグロ)

[5] 第 5 楽章: 牧人の歌、嵐のあとの喜ばしい感謝の感情(アレグレット)

フランツ・シューベルト(1797-1828)

交響曲 第 5 番 変ロ長調 D.485

[6] 第 1 楽章: アレグロ

[7] 第 2 楽章: アンダンテ・コン・モート

[8] 第 3 楽章: メヌエット(アレグロ・モルト)〜トリオ

[9] 第 4 楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ

[録音]1971 年 5 月 24 日~26 日(ベートーヴェン)、1979 年 12 月 18 日&22 日(シューベルト)、ウィーン、ムジークフェライン大ホール *赤字の日幅は国内盤 LP の表記です。今回のジャケット表記は月までです。

[初出]

ベートーヴェン 2530 142(1971 年)、シューベルト 2531 279(1980 年)

[日本盤初出]

ベートーヴェン MG2317 (1972 年 3 月)、シューベルト 28MG0015 (1981 年 2 月 28 日)

[オリジナル・レコーディング]

[エクゼクティヴ・プロデューサー] ハンス・ヒルシュ博士/エレン・ヒックマン博士(ベートーヴェン)、ヴェルナー・マイヤー(シューベルト)

[レコーディング・プロデューサー] ヴォルフガング・ローゼ(ベートーヴェン)、ヴェルナー・マイヤー(シューベルト)

[バランス・エンジニア] ギュンター・ヘルマン

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生 岡本 稔

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

AVお客様相談室

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242

受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00 (土・日・祝日・弊社休業日を除く)